



卷頭言

「介護について思うこと」 聖パウロ教会牧師：小勝 奈保子



介護の課題は三つの側面があります。介護者と医療と住宅ですが、これらの問題は重複する場合もあります。まず、介護者としてキーパーソンは誰か、ご家族の中で中心的な役割を担う人物です。夫婦、兄弟、子ども、義理家族、同居、別居とキーパーソンとの関係は様々です。介護の決定権をご本人が持つ場合もあります。しかし、介護はキーパーソン一人で担うものではありません。他の家族の協力がどの程度得られるのか、役割や分量が違っていても一人で抱えないということが鉄則です。また、身内が一人だとしても、他に相談できる誰か、医療・福祉従事者、友人、経験を持つ人のアドバイスを得ながら、病状変化に応じてできる範囲の介護に整えていきます。できる範囲の介護ということは、つまり、できない範囲を認めて、限界を超えてすることに気づき、広く他の方法の選択肢を考えて、思い詰めないことが大切です。

老々介護の難しさは、孤立が原因と言われますが、他者に頼らない、情報を得にくい、相談機関が十分な対応をしなかった、相談機関の方でもキーパーソンの解決能力に応じて、丁寧につなげていく必要があります。次に医療の問題です。医療をどの程度必要とするのか、服薬のみか、何か処置を必要とするのか、多岐にわたります。経験のないご家族にとっては、排泄介助や医療処置は戸惑いも多くストレスです。ですが、日々のケアの中で、一つずつ学んで技術を習得されるご家族もおられます。訪問診療や訪問看護といったサービスを利用しながら、ご自宅においても臨終の看取りができるようになりました。最後に住宅の問題です。住宅の選びは大きく生活が変わります。在宅で暮らすのか、あるいは、福祉や医療施設で暮らすのか。昨年首都圏へ引越しまして、住宅環境の厳しさを感じています。23区内は家賃も高く介護施設が不足しておりますので、今まで住んでいた家の近くで新たに住む場所を確保するのは難しい、そこで近郊の他県で入所施設

を探すことになります。しかし、できればご家族やご友人の家に近い施設を選んでほしいと思います。ホームへ入所されますとご家族は安心されますが、ご本人は寂しい思いでおられます。日々の暮らしは生活介護だけで満たされるものではなく、家族の一員としての安心は、ご家族にしかできない心のケアです。ホームに行きますといろいろなお話を伺います。共同生活には認知症の方もおられます。部屋に勝手に入って来るので困るという話はよく聞く悩みです。集団生活は今までの自由な暮らしから一変して、とても窮屈に感じます。入居者の多くが疾病を持ち病状が進行しお身体が弱くなります。そのような日々の暮らしに、精神的に辛くなることもあります。

昨年、NHKの番組で特別養護老人ホームに勤める常勤医、石飛幸三氏の「平穏死」の取り組みが紹介されました(著書「『平穏死』のすすめ」)。延命治療をせずに、食べられなくなったら自然にご本人の生きる力に任せしていく、ドクターは家族と面談を重ね病状を説明し家族の選択を助けます。そして、臨終に向かう数日間、子や孫が集まり家族の時を過ごします。これは先駆的なケアで、常勤医の配置は稀なケースです。多くの施設は非常勤医ですし、入院治療を勧められることもあります。終末期医療をどうするのか、延命治療や葬儀に関する事柄は、元気な内に家族で話し合っておかれると、いざという時に家族の選択を助けます。疾病が発症してからですとご本人には聞きにくいこともあります。ご本人がどのような医療や葬儀を望むのか、家族がご本人の思いを知りませんと、どうしてよいのかと悩みます。これでよかったですと死期を早めたのではないか、本人の苦痛を引き延ばしたのではないか、看取りの後で、介護者の心には様々な思いが巡ります。最期に、み言葉を届ける神のケアがあります。讃美歌を歌う、聖書を読む、お祈りをする、病状が進行し寝たきりで意識が無くても、語りかけて祈る、その方の靈はしっかりと目覚めていて、神のみ声を聞いておられます。靈の交わりの内に神さまのみ手に委ねる、インマヌエルの主は、その全生涯を豊かに祝福してくださいます。

“会長会＆女性の集い”から



4月16日(土)聖パウロ教会に於いて第3回会長会＆女性の集いが開催されました。当日は遠方からの参加者も多く見られ、77名の方が来会されました。

第一部開会礼拝では小泉嗣牧師の祈りと奨励「あなたがたの中で」:ヤコブの手紙5章13節～16節「あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。主に癒やしていただくために、互いのために祈りなさい。正し

い人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします。」からお話をいただきました。その上で「私たちは祈ること、祈り続けることしかできない。主よ、その力と思いをお与えください」との祈りが導かれました。

---『介護する側の実際と意義』講演レジュメ---

1. 介護の実際

● 医療・介護・住居

● 認知症(アルツハイマー型、脳血管症)、脳血管障害後遺症、パーキンソン、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症、関節リウマチ、骨折・骨粗しょう症、変形性関節症、糖尿病、高血圧、心疾患、悪性腫瘍、泌尿器疾患、呼吸器疾患、神経痛、うつ病、精神疾患、褥瘡、皮膚疾患、視覚聴覚の低下と障害、経管栄養、胃ろう、尿道カテーテル、人工肛門、在宅酸素、人工透析。

● どこで介護を行うのか。誰が介護を担うのか(キーパーソンと協力者)

病院:短期治療・長期療養(介護療養型医療施設)

施設:(特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、軽費老人ホーム、老人保健施設、認知症グループホーム等)

有料老人ホーム(介護付き→介護専用型・混合型・住宅型・健康型)

2. 終末期の介護

● どこで看取りを行うのか。

在宅:専門医療 担当医と相談しておく。

施設:病状変化と急変時の施設の対応を確認しておく。

● 葬儀について。

(本人と)家族で話し合っておく。

主に癒やしていただくため、に互いに祈りなさい

続いて、昨春から季節が一巡する中で、天に召された各教会女性会の敬愛する姉妹方を憶えてお祈りした後、二日前の14日夜に発生した熊本地震に被災された多くの兄弟姉妹へ、強い余震が続く中、どんなに心細く、過酷な状況に身を置かれているかを覚えて、主の守りと迅速な救援を祈りました。今できること、これからすべきことを導いてくださいと一同心を合わせました。

昼食は聖パウロ女性会の温かい特性そばが大好評で美味しいいただきました。(※男性のお手伝いも含めて感謝でした)。

第二部は「介護する側・される側、双方の視点からの意義と実際を考える2回シリーズ」の初回を小勝奈保子牧師に講演していただきました。少子高齢化が枕詞となるかの如き日本の状況で、私たちと介護は暮らしの中で避けて通れない課題の一つと言えます。23期女性会が始動した第1回“会長会＆女性の集い”アンケートでも、介護について取り上げて欲しいとの要望が多く、講演後の質疑応答の熱さからも参加者の関心度の高さが伺えました。

4月16日第3回会長会＆女性の集い資料

身寄りのない人の場合はキーパーソンとなる人(友人、成年後見人、施設長、担当ソーシャルワーカー、牧師等)と相談しておく。

3. 介護と信仰生活

● 牧会訪問:讃美歌を歌う、聖書のみ言葉を聞く、聖餐式に与る、お祈りする。

● パストラルケア:「命を育むパストラルケア-神のみ手の働き-」ジル・マックギルブレイ(聖公会出版)

4. 介護者のケア

● 介護を一人で抱えない。家族で話し合う。福祉サービスを利用する。介護者教室に参加する。

● ストレスの発散。

● 看取りの後で…喪失感や罪責感等、様々な思いが巡ります。ゆっくりと心を休め、新しい日常生活のリズムを取り戻しましょう。

◆ 小勝奈保子牧師:

日本ルーテル神学大学・社会福祉学科(1988年～1992年)
高齢者在宅福祉サービス:デイサービス・ケアワーカー、福祉公社・コードィネーター、ショートステイ・ソーシャルワーカー、デイサービス・ソーシャルワーカー、在宅介護支援センター・ケアマネージャー
日本ルーテル神学校(2001年～2005年)

下関教会・厚狭教会(7年)、豊中教会(3年)、聖パウロ教会(1年～)

講演会アンケート&質疑応答から①

■ 介護の実際・終末期・看取りについて

▶ 主治医とは常に話している。

▶ 施設・老人ホームの特徴、施設の終末期の対応などが分かった。

▶ 介護する事は一人で頑張る事ではなく皆で協力し合うこと。

▶ 母が要介護2の独居生活で心配。これを契機に施設見学をしたい。

▶ 胃ろうについてや生の体験談が聞けて良かった。

▶ “死に方”は思い通りには行かない。介護されるなら、その時一番妥当な方法を望む。娘・息子にもただ見守っていてほしい。

▶ 介護の現場経験者である小勝牧師のお話はとても有益、有意義な時間に感謝。

▶ 期待通りの内容に満足できた。

▶ 常にありのままの生き様を見られている意識を大切にしたい。

▶ とても身近なテーマであり、自分自身のことを考えさせられた。

▶ 両親を看取ったが、今後のことは夫婦で良く話し合いたい。

▶ 両親が「延命処置はしない」との意志を自分たち子どもが確認共有していたので、“その時”に有効だった。話合いは大切。



皆の祈りの内に御言葉を聴く…全てを委ねて

雪ヶ谷教会 * 高橋 要子

その日、近隣に住むお仲間と一緒に「会長会&女性の集い」に参加しました。私にとっては久々の出席です。熊本地震が起きた二日目でもありましたので、小泉嗣牧師の奨励「あなたがたの中で」に於いても、ルーテル関係の被災状況が話され、皆の祈りの内に、ヤコブの手紙5章13節～16節を聴き取ることができたと思いました。

また、2015年度に召天された19名の姉妹方を憶えて祈りを捧げました。昼食は会場となった聖パウロ教会女性会のご厚意で、おそばを美味しく頂きました。午後の講演「介護する側の実際と意義」では、福祉にお詳しい小勝奈保子牧師が話され、質疑応答がなされる中、介護を経験された数の方々の



質疑応答でさらに深まるそれぞれの思い*

お話を聴きしました。各グループが小ぶりのテーブルを囲み身近に話すことが出来たことも良かったと思いました。私自身の母の介護は短い間でした。寄り添って生活を共にした時期だったと思っています。晩年の母はよく言っていました。「ありがとうネ」と。

この言葉で私の心は満たされました。看取りの後に罪悪感など様々な思いが巡ると言います。しかし、介護自体大きな意義を持つのだということを確信したいのです。遅かれ早かれ、自分も介護を受ける側になっていくでしょう。どんな形で受け入れ、過ごそうとするのか意思表示等していません。私は、「どのような事態を迎えようとも、神様に全てをお委ねします。」と祈りながら日々を歩んでいきたいと願っています。

最後になってしましましたが、小泉嗣牧師、小勝奈保子牧師の更なるご活躍をお祈りし、各協力委員のお働きと、この会を準備して下さった教区役員の皆様、聖パウロ教会女性会の皆様に心から感謝申し上げます。



一人一人が主の子羊…延命治療の問題

市ヶ谷教会 * 前山 貴史子

4月16日(土)聖パウロ教会にて会長会と女性の集いが開催されました。第1部は、綱春子姉妹の司会で開会礼拝が行われ、小泉嗣牧師からお話を伺いました。今年も、前年に召天された方々のお名前を読み上げ、ろうそくを灯して、一同で祈りましたが、それはイエス様が語られた羊の一匹一匹を大切にされたことと、一人一人を忘れずに大切にする姿勢が通じるように感じました。その後、八木久美女性会会長、小泉牧師、小勝奈保子牧師のご挨拶がありました。続いて各協力委員からのアピールタイム後は昼食会が開かれ、各テーブルに分かれて歓談、リフレッシュの楽しい時を過ごしました。聖パウロ教会女性会による「美味しい特製そば300円」のサービスと共に茶菓、飲み物も用意され、楽しい一時を過ごしました。

実際に現場で働いていらした小勝先生のお話の後、出席者から体験談、質問、意見など活発なやり取りがありました。中でも印象に残ったのは、延命治療の問題



ステンドグラス:聖パウロ教会*

でした。「“延命のみを目的とする措置は取らない”と家族間で合意していたにもかかわらず、その場になつてみると、残された家族には、少しでも生きてほしいとの思いがあった。」というお話を聞いて、自身の場合に重ね合わせ、切実な問題として考えさせられました。

- ▶客観的に介護について考えることができた。
- ▶介護を受ける立場に年齢が近づき、改めて身近な事として捉えた。
- ▶親子・夫婦・兄弟で折りを見て話し合っていると良いと思う。
- ▶リビングウィルについての話が欲しかった。
- ▶現在85歳、食事他で介護されない様に頑張っている。
- ▶母を見取ったが、これからは夫婦で良く話し合いたいと思う。
- ▶介護のアウトラインが理解できた。「最後の医療」の新聞記事が参考になった。

- ▶みなさんの様々な介護体験・場所の様子が分かり良かった。
- ▶介護と信仰生活、介護者のケアについて、更に詳しく聞きたかった。
- ▶母との係わり方が前向きに感じられるようになった。近所の方や、姉と共に介護をしていくのが、楽しんで出来る様に思う。
- ▶介護は一人で頑張るのではなく、皆で担う事と気付かされた。
- ▶タイムリーな話題だった。

* 特集:介護する側の実際と意義・P10へ続く*

❖甲信地区女性の集い

2016年度女性の集いが、6月11日に松本教会で開かれました。東教区女性の会長さんははじめ役員の皆様も、大勢応援にきていただきました。開会礼拝では、甲府・諏訪教会の牧師である市原先生が「甲信地区の教会は、いわば、木で言つたら枝のようなものだけれど、枝が葉を伸ばし、太陽の光をいっぱいに浴びて元気であれば、木も元気になって大きく成長することができる。」とお話され、お言葉通り元気が沸いてきました。

次に、飯田教会の市川佐代子さんが、信徒としての東北大震災の支援活動の様子を文章で届けて下さり、何年も前から地道な支援活動に取り組んでいることを知りました。市川さんの意志の強さと行動力に頭が下がりました。

午後は、4～5人の小グループに分かれ、フリートークの時間を持ちました。いくつかのテーマが決まっており、その中で、わたしたちのグループは「入信のきっかけ」をテーマにお話しする人が多かったです。おひとりおひとりの入信の道筋にはその人を支える神様の存在を感じられ、生き生きと語るお顔には、神様に信頼している安らぎとパワーを感じました。私たちが入信できたのは、自分の力によるではなく、神様から御手を伸ばされたからなんだと、強く実感しました。フリートークで、普段の教会の交わりではありません話題に上らない入信の道筋が聞け、すぐ間近にお一人お一

諏訪教会 * 小口むつみ

人の生きた信仰を実感でき、感動のひとときが持てました。有意義な一日をありがとうございました。



自然と笑顔が溢れます*



青空に映える赤屋根の松本教会*



久しぶりに一堂に会して*

シャロンの花 を訪ねて Vol.3

神様に守られ、タレントを活かし、助け合い教会を守る

諏訪教会 * 垣内 恵子

諏訪教会の女性会は活発な動きを見せています。市原牧師を甲府教会と諏訪教会の兼牧という形でやっています。それだけに信徒一人一人が自立していかなければなりません。すべての信徒がこの小さな教会を守っている主体性のある教会です。まず礼拝式文は代議員の小口理恵子姉の作成。ルーテル教会の司式は音楽的に構成されていますが、若い市原悠史牧師の張りのある声にうっとりし、さらに説教はわかりやすく胸にしづんと入れます。礼拝後のひと時はくつろいだ時間。みな活発に意見交換し、讃美歌やフォークソングなど歌ながら共に食事をする楽しいひと時。この準備は宮澤アイ姉、村山恵子姉が中心になって、上條富子姉がカレーや煮物を作ってくださいます。忘れてならないのはお店よりおいしいケーキは荒木兄の制作。これがまた甘さを抑えたふわっと仕上げたケーキ。

女性会では特に宮澤アイ姉が釜ヶ崎やブラジル、アフリカに向かって長年、古着などを送っていました。共に送り続けた及川和子姉は昨年、天国に昇天されました。女性会の中心的存在であった及川姉を失い今ぽっかり穴の開いたような寂しさを味わっています。普段は無人の諏訪教会。礼拝前にいち早く来て、鍵を開けてくださるのは宮澤八郎兄とアイ姉。雪が降れば雪かきも。草であふれた駐車場は小口むつみ姉が腰に草刈り機を付けて一刀両断に草を刈ります。神様に守られてそれぞれのタレントを生かし、皆助け合い教会を守っている諏訪教会の女性会です。



自立し、助け合いながら仲間を思う*



歌にあふれた教会*

❖ 甲信地区“女性の集い”プログラムから

■受付:10時30分	担当:飯田教会	「仙台での奉仕と今」 飯田教会:市川佐代子婦代読 野口勝彦牧師
■開会礼拝:11時~		
■教会讃美歌:333 オルガニスト:小口むつみ姉 担当:諏訪教会		
■奨励:渡辺 賢次牧師 哀歌3:21~33(旧約聖書1289頁)		
■紹介:		
・渡辺賢次牧師夫妻 飯田教会副代議員:伊藤邦江姉		
・東教区役員 東教区副会長:皿井千穂子姉		
八木久美姉、綱 晴子姉、皿井姉、根本明子姉、菱田典子姉		
岸田多希子姉、保坂和子姉		
・東教区会長挨拶 八木久美姉		
■お話:11時40分 担当:飯田教会		
・東日本大震災、支援活動と熊本地震に対する支援について		
		■写真撮影
		■地区長:市原悠史牧師(前) 野口勝彦牧師(現) 12時
		■昼食 担当:長野、松本教会
		■フリートーク:13時40分 担当:飯田教会
		・テーマ:入信のきっかけ、教会生活での思い出、これからの教会生活など上記テーマを参考に一人5分程度で自由に話す。他の人は黙って聞く(うなずくのはOK)。5人くらいのグループになる。
		時間に余裕 があればグループ内で話し合う。
		■閉会の祈り:15時
		■教会讃美歌 365
		・お祈り 甲信地区会長:皿井千穂子姉



会合当日は、抜ける様に青い空と新鮮な空気にまず感激し、甲信地区:山梨・長野全域の甲府・飯田・松本・長野・諏訪教会の姉妹兄弟が共に集えたことに感謝の祈りをささげました。何をするにも車が必要不可欠の地で、自然と共に存する中で、礼拝を守ることの大変さと、だからこそ礼拝をささげる大切さと教会や礼拝堂を守り続ける強い思いが伝わってきました。

フリートークにも熱が込み、楽しい親睦の時は瞬く間に過ぎました。次の再会を約束して、一同帰路につきました。会場:松本教会、担当:飯田教会始め甲信地区の姉妹兄弟・牧師みなさまに感謝!



シャロンの花 を訪ねて Vol.3

「過去から未来への架け橋を！！」

稔台教会*石飛 久子

伝道開始60数年が経ちますが、その時から現在に至るまで女性は教会の良き担い手でした。しかし他の女性会同様、少子高齢化は非常に厳しい現実で、メンバーは激減し次世代の担い手に苦慮しています。

そのような中で女性会は活動の規模を縮小、5年程前から毎月の例会を隔月に変更(偶数月第三日曜日礼拝後)しました。クリスマス・フェアを中止して、女性の負担を軽減し息の長い女性会存続を目指しています。

聖壇のバナーは婦人会と称していた頃の奉仕の賜物で、献金かご、その敷物に至るまで、女性たちの業を教会堂の随所に見ることが出来ます。

現在は20名ほどの群れですが少数精鋭と意気込み、自らの活動のみならず、教会の要請に応じて女性の持てる力を大いに発揮しています。また教区女性会の呼びかけに応えて、一日神学校出店の時期になると不定期ではありますが仕事会を行なっています。そして高齢者女性の持ち味を活かした、粘り強くしなやかな活動を進めています。同時に次世代を取り込む方策やプログラムの実施が求められています。

今は困難でも明日はきっと!私たちはいつでも笑顔で呼びかけお迎えします!



奉仕の賜物:聖壇のバナー*



いつも笑顔でしなやかに*

◆東日本大震災被災地を訪れて 豊かな自然と心溢れる東北の地

6月21日～23日にかけて女性会連盟の企画により、連盟役員4名・各教区会長5名と野口勝彦・小勝奈保子両牧師の計11名が仙台に集合して、仙台教会を起点に東松島、石巻、南三陸町、気仙沼を訪問しました。一行の中には初めて被災地を訪れる者、何度か通った者、久しぶりの者と様々な立場から被災地の「今」を感じよう、見つめようとした。現地で生活している方々に対して真剣に向き合おうとして興味本位にはならないようにと心に留めながら。

2泊3日の期間限定の駆け足感は拭えないとしても、野口牧師(元JLER派遣牧師)、小勝牧師(元ルーテル支援センター長2011.5)の案内でそれぞれに見て話して触れて改めて感じたことは、「被災地で暮らし続けること」とは「どんな現実からも逃れずに向き合うこと」でもあるということでした。

わずかでも、見て話して触れて感じたことを伝え続け・係わり続け・祈りと思いを途切れさせないことが、訪れる者に課せられた使命でもあると思いました。

私たちの訪問を歓待してくださった明るく心優しくひたむきなみなさまの明日への希望を祈りつつ。



“平和の鳩”的もと集いましょう*



大空に手を掲げる日和山公園大鳥居*



防潮堤に囲まれて立つ
防災センター*



復旧を待つ鉄道線路*

シャロンの花を訪ねて Vol.3

多くの教会活動と共に、若い力にも励まされて

蒲田教会*大坪 彰子

戦後まもなく荒廃した蒲田の六郷地区に「幼稚園が欲しい」との地域のお母さんたちの願いから蒲田ルーテル幼稚園が出来、蒲田教会が設立されました。教会婦人会は主に幼稚園の母の会、卒園児のお母さんが主力メンバーだったようです。以来、幼稚園とは密接な関係を持ちながら活動が続いている。現在は「女性の会」と名称も変わり教会に集うメンバー15名が主になって活動しています。

例会は第1日曜日:聖書研究(連盟の聖書研究を参考に)、読書会ではヒルティ「眠られぬ夜のために」を渡邊牧師の解説で読み始めて8年目になります。第2火曜日:女性の会主催なごみの会は、教会に集う年配者や会員のご家族も加わり毎回7~10人が聖書を読みその後、手仕事をしながら交わりの時を持っています。愛餐会の準備:第1日曜日礼拝後の愛餐会のために礼拝前に集まり準備をします。バザー:毎年10月の第3土曜日に幼稚園の保護者会と一緒に行うバザーでちらし寿司600食分を調理・販売を担当、他に手芸品やカード、献品などの販売もしています。また教会行事(クリスマス、イースター、流しそうめん、総会等の食事の準備を含め)の手伝いや月報「ろくごう」の丁合い・発送の手伝い、礼拝堂のお茶の準備、教会学校への支援等を子どもからお年寄りまでに心を配りながら励んでいます。会員の高齢化は顕著で、昨年から今年にかけて3名の会員が帰天されました。淋しくなりましたが新しく加わった20代の若い方の頑張りに励まされています。



聖書研究・読書会・教会行事を支える頼もしい女性会*



❖被災地訪問を終えて

時間は時として敵になることもある。そう思いました。しかし、時として時間は強力な援軍ともなる。訪れた地の人々にとっては援軍であって欲しいと思いました。あの惨禍で今までの全て(有形、無形)を変えられ、今までの時間でわずかでも前に進めたら、それで良しとしなければならなかつたことがどれ程心に重くのしかかってきたのか。私は考えただけでも、うずくまるほどの悲しみを感じずにはいられませんでした。それでも、暖かいおもてなしをして下さり、それは明るく、笑い声が絶えないような生活のように錯覚していました。穏やかで明るく、互いに思いやつて私たちと接しました。

❖再びの訪れに願う

東北の緑豊かな地に起こった地震と津波から5年4ヶ月を数えた6月。訪問の機会を得て再び訪れた彼の地での出会いと再会は、時の経過という薄皮が、一枚一枚重ねられたかの様な変化を見せていました。

東洋の宝石と言われる真珠の母貝となるアコヤ貝は、貝殻の内側に異物が混入すると、異物に対して真珠層を巻いてできるのが真珠となるそうです。

東北の地を突然襲った異物は、そこで暮らす人々に大きな悲しみと痛みをもたらしました。どんなに辛い痛み悲しみにも避けることなく、向き合い続けざるを得なかった5年と

女性会連盟 副会長・会計 * 根本 明子

てくださいました。

しかし、話す内容がとてもつらく、肉親を亡くされたことを初めて話された方、あるいは、すっかり無口になり、私たちに少し話をされた方。聞けば、ようやく最近話をするようになられたとの事。どれ程の心の痛み、傷なのかと計り知れない苦しみを垣間見た思いです。海沿いの地には嵩上げと重機のみ。人々の姿はなく、工事の人たちのみでした。

私達にできることは祈ることと、忘れないこと。それを形にして現していくこと。



女性会連盟 東教区会長 * 八木 久美

4ヶ月。これからもその暮らしは途切れることなく時を刻んでゆく中で、私たちを喜んで迎えてくださった姉妹方と話し、喜び、笑い、泣き、触れ合う度にその表情や姿が、幾重にも繊細な光沢を帯びた真珠のように見えました。

頗るくば、これから時が希望と平安に満ちた健やかな明日へと繋がりますように。そして私たちが今を生かしている者として共に出会い、思い、繋がり係わり続けること、伝え続けることを大切にしたい。その気持ちを強くされた訪問の時となりました。感謝と共に祈りつつ。

シャロンの花 を訪ねて Vol.3

白ゆりの会

「白ゆりの会」は毎月第3日曜日の礼拝後に定例会を行なっています。会員数は25名で、毎月の定例会は15名前後が参加して聖書研究の後に女性会連盟や教会内からの報告、個人消息などの情報の交換、話し合いの時を持っています。今回の原稿を書くに当たり信仰の先輩の姉妹方から、発足当初は「婦人会」という呼称で定例会を木曜日に持ち、週の半ばに聖書の話を聞くことができたのは良かったと伺いました。会員の年齢も若く海や山に出掛けて行き、自然の中で交流を深めるひと時もあったそうです。仕事を持つ女性が増えて定例会も木曜から日曜日に移りましたが、週の半ばに神様に集められ、姉妹達と共に神様の話を聞き、自然の中に出掛けて神様の創造物に目を向けるひと時が与えられる…時代の移り変わりを感じます。現在は戸外での定例会はありませんが祈り・支え合い、神様による恵みのひと時を過ごすことは変わらず、愛餐会や教会のお掃除などの働きも継続されています。さらに最近は教会の外に向けての宣教として、今秋には白ゆりの会メンバーが主体となり、教会会員の方々にも力を借りて頂き、地域や知人の方々にご参加いただける映画鑑賞会を開催することになりました。この会が良い伝道の時となりますように切に祈っています。

神様がこれまでの一歩一歩の歩みを共にいて下さったことに感謝して、今後の歩みも共にいて下さることを祈ります。

都南教会 * 安田 やまと



白ゆりの匂うがごとき笑みと共に*

美味しい手料理が並ぶ愛餐会*

❖ TNG子どもキャンプin 広島

ニューヨーク州オールバニ* 加藤 真由美

「いつもみんなが平和でいるために私たちはどうしたらいいのだろう？聖書で言うところの平和とはなんだろう？」こんな大人にとっても難しい問題に、全国から集まった32人の5、6年生の子どもたちが、広島の地で思いや考えを向けました。8月8日(月)の朝、東教区からキャンプに参加する5、6年生11名が東京駅に集合、参加者の一人の父親である本郷教会:安井牧師の派遣の祈りの後、広島教会に向けて出発。私は引率兼生活係として参加しました。

広島教会に着くと、子ども達は各班2名のリーダーのもと、4班に分けられました。伊藤チャップレンによる開会礼拝の後、子ども達の緊張をほぐすためのゲームやグループタイムの間、広島教会女性会:マリア会の皆様が夕食の準備をして下さいました。キャンプに参加する度に、現地の女性会皆様の暖かい励ましやお手伝いに感謝の思いで胸がいっぱいになります。夕食後は「ともこの冒険～現代の女の子ともこが時間スリップして佐々木禎子さんにお会い、原爆の悲惨さを学ぶ」アニメを礼拝堂でみんなで視聴しました。おしゃべりをする子は誰もおらず、真剣にスクリーンに見入っていました。その後でグループに分かれて、アニメの感想を話し合いました。

翌日の8月9日:長崎に原爆が投下されたこの日は、平和公園、原爆資料館、慰霊碑、本川小学校、原爆ドーム等を班ごと

に回るハイクが行われました。各ハイクポイントではスタッフが待機しポイントの説明と、子ども達の体調チェックや管理(30度近い暑さを考慮)を実施。途中、長崎の原爆投下時刻11時02分には各班がそれぞれの場所で「平和の祈り」を捧げました。一昨年のキャンプ以来2度目の広島ですが、ハイクの途中、見聞きするものに何度も胸が詰まり、こんな悲惨な出来事が再び繰り返されないことを祈らずにいられませんでした。一緒に回った子ども達も、スタッフに質問する子、黙って展示物の説明を読む子、写真を撮る子、それぞれが広



原爆ドームを前にして真剣に見、聴き、感じる、暑い夏*

シャロンの花 を訪ねて Vol.3

三鷹教会の歩みと婦人会からオリーブの会へ

三鷹教会は2017年に設立30年を迎えます。1961年に三鷹駅近くのヘンシェル宣教師宅で集会が始められ、長い準備期間としての三鷹集会所時代を経て、中央線沿線地区・東教区、ことに武蔵野教会を母体に支援を受け、教会堂、牧師館も持たず(その後購入)ルーテル学院大学のチャペル(村野東吾氏設計)を利用し、集会所も大学の好意で学内に設置された第1種教会として1987年に設立されました。1976年に宣教師宅から、日本ルーテル神学大学(現ルーテル学院大学)228番教室に移り神大の教員方のお力添えで新しい旅立ちができ、独立へと進んだのです。武蔵野教会から子ども含め58名が株分けされました。三鷹教会として歩み出してからは婦人会(当時の名称)の活動が活発化してバザー、修養会、特別伝道集会、コンサートなど次々と教会活動のお手伝いをしたと当時の記録にあります。

現在は多くの女性会員が教会役員を務めて下さり、オリーブの会としても教会役員に協力する形で活動をしています。教会行事との連携、例えばバザー、祝会などは典型的な協力の例です。今年のオリーブの会新年会ではどのような活動を各自が期待しているか活発に話し合い「聖研をしたい、講演会、旅行など和気あいあいとした会に。お料理のレシピ公開なども。ゆるい繋がり、すっと来てすっと帰りたい、忙しいので無理をしたくない」など様々な希望が出ました。会長を務めさせていただいている私が一番ドタバタと忙しくしておりなかなか予定が立てられず、会長不在でも「会として活動できる」そんなオリーブの会にしたいと思いつつ皆様に甘えています。来る30周年記念事業は記念礼拝・祝会、記念誌発行、シリーズ記念説教などを企画しています。準備委員としてお手伝いしていますのでオリーブの会も教会のお誕生日をお祝いすることが喜びとなることを願っています。



教会バザーの行列と当日の賑わい*

島を知り、感じることができたように見えました。教会に戻りハイクを振り返り「平和である/ないこと」を各自考え、模造紙中に貼っていました。夕食後の夜のプログラムでは伊藤チャップレンから「聖書では平和についてどう語られているか」を学び、グループ内で「自分達の考える平和と聖書でいう平和と、どう違うんだろう」というところまで更に考え合いました。

❖ ひと夏の成長

原爆投下から71年、平和宣言と原爆犠牲者に哀悼の誠を捧げられた6日の翌日に、私は「第18回ルーテルこどもキャンプ」前日準備のため広島教会にいた。全国からどんな子どもたちが集まつてくるのか、ワクワク、ドキドキしていた。8日午後教会に到着した32名の子どもたちは自分のグループを見つけて輪の中に入ったが、そのぎこちなさや不安は私にも十分伝わってきた。

広島公園のハイクプログラムで私は2人の男子についていた。目が離せない元気いっぱいの5年生K君とY君だったが、記録的な暑さの中をみごとにやり抜いた。キャンププログラムは内容も時間も本当に充実したもので、小学5・6年生にもこれだけのことができるのだと感嘆した。

すべてを終えた出発の日子どもたちはみな仲間だった。発表の場でK君は「平和のため僕がしたいことは日曜日に教会に行って祈ることです。」と宣言し、Y君は「僕は平和のために普通の生活を大切にしたいです。」と話した。

彼らはたった3日のうちに神さまによって新しくされたのだと実感した。果たして私もそうだろうか…。子どもたちは全員笑顔で帰って行った。

❖ 初めてキャンプに参加して

初めて広島でのルーテルこどもキャンプに参加しましたが、今回は東京からのスタッフ希望者も多く、当初は参加が難しく思われ息子も参加を見合わせました。名古屋教会からのスタッフの姉妹が参加費を自己負担すると言って下さったり、神様の不思議な御業が働き、各教区女性会からの助成金がたくさん集まり、名古屋教会の姉妹も参加費を負担せずに済んだとのことを後から伺いました。ハレルヤ!!

私は引率・生活のスタッフとしての参加で、子ども達とのプログラムに直接関わる機会は少なかったのですが、子ども達が安全で楽しい3日間を過ごせるようにと企画・準備をして下さった実行委員と広島教会の方々の苦労はひしひしと感じました。

8月8日～10日と広島は猛暑で、2日目のハイクでは結構な距離を、天田神学生と河田兄がリーダーのグループと一緒に歩きましたが、看護担当のスタッフの配慮で大事に至る様な体調不良の子どもは一人も出ませんでした。様々な場面でのスタッフの方々の対応からは多くの事を学びました。教会ではCSに携わっておりますので、この経験を今後のご奉仕に生かせるよう頑張りたいと思います。主の御名を讃えつつ…

子どももキャンプのお手伝いは3度目ですが、イエス様によって集められたスタッフ皆さんがどれ程事前に準備をし、キャンプ中も真剣に子ども達一人一人に向き合っているかに接し、子ども達が「神様に愛されている」ということを毎回実感します。そして子ども達もキャンプで共に祈り、賛美し、そのことを学んだことでしょう。全国にいるキャンパー達のこれから成長を祈ります。

津田沼教会 * 清水 英子



原爆死没者慰靈碑*

平和って何だろう*



礼拝堂：発表する側も聴く側も新たな発見が*

むさしの教会 * 佐藤 泰子



思い出いっぱい
楽しい車中*

お世話になった広島教会女性会 姉妹*



地球平和監視時計*

最後の医療 自分たちで考えて悔いなく「平穏死のすすめ」著者 石飛 孝三さん

特別養護老人ホーム(東京都)の常勤医の石飛孝三さんはこの10年間、入所者のみとりに取り組んできました。著書『『平穏死』のすすめ』では、行き過ぎた延命治療の課題を提起しました。

アンケート的回答をみると、予想以上に話し合っている人が多いですね。「最後の医療」をどうするかは、いま多くの方が直面しつつある問題なのでしょう。老いて衰え、最後の時期が近づくと、徐々に食べられなくなり、眠る時間がが多くなります。そして肉体的にも精神的にも苦痛がなく、穏やかに亡くなります。命の終わりは自然に任せることができればいいのだということを、入所者の最後の様子を見せていただき、教わりました。そして、時間の長さだけにこだわるのはやめるべきだと考え、それを「平穏死」と名付けました。

「自分は管だらけで最後を迎えたくない」という方は多いようです。ただ自分の親や夫婦が「最後」の状態を迎えると「何とか命を延ばして欲しい」と変わることがあります。私が勤める施設の入所者の平均年齢は90歳近くで、認知症の方が9割です。点滴など医療技術を駆使して1日でも長生きしてほしいと考える家族もいれば、少量の食事と水分で最後を過ごしてほしいという家族もいます。

母と約束 延命処置せず・私の3原則は

大切な人の死が間近に迫った時、どんな医療を求めるのか。家族がアンケートに悩みを寄せています。

●「先日、母が急逝しました。『自分で判断できない状態になら一切の延命処置はしない』と話合って決めましたが、救急隊が到着し、AEDをかけても十分に心肺が戻らない状態で心臓を動かす薬を使うか否かを問われ、迷いました。母の年齢、持病、その時の状況から考え、それ以上の蘇生処置は行わなかったので、病院への搬送後他界しました。今でもあの時の判断が正しかったのかと何度も考えますが、母と言葉で確認し合っていたことで『約束を守った』と思えることが私の心の支えです」(東京都・50代女性)

●現在進行形でこの問題を考えています。昨年11月末から夫の突然入院でどんどん悪化していく病状にただただ心配するばかりで私のできることは毎日顔を出すぐらいです。本人の家へ帰りたい希望をかなえてあげたいと強く思っています。が、病状がそれを許さない中で、せめて少しでも口当たりの良いもの、好きな味をと思ってもなかなか許可が出ません。肺炎になり、経管栄養を勧められま

したが、本人の拒絶感を思い拒絶しました。救命救急病棟では気管内挿管も意識があるので断りました。(神奈川県・60代女性)

●「現在、発病から4年経った膀胱がんの主人が自宅療養中です。不安でしたが、介護保険のもと、訪問医師と看護師を紹介していただきました。4年間でいろいろあった中、今の大切にしていることは、①主人の考えを尊重して、笑顔で穏やかに過ごす日を1日でも長くすること。②子どもたちにとつて、家が安心できる場所にあること③私がうつにならないこと。発病1年目に、私が考え過ぎてしんどくなつたのを踏まえて、こんな風に考え主人にも伝えました。困難なことが起きますが、この三つを踏まえて考えると答えが定まるようになります。私たちに関わっていただいている、すべての方に感謝しています」(京都府・50代女性)

●90歳の父が亡くなりました。はたからはとても90歳には見えないと言われた大柄な体躯、記憶力の確かさ。しかし末期の肺がんと診断されたのが昨年10月、2月15日に10日間の入院後に亡くなりました。病院では意識がしっかりしている間に身体拘束されてしまい見舞う度に家に帰ろうと言わ

れ、心が張り裂けそうでした。自宅で24時間看る自信は私にはなく悩んでいた間に父は急変しました。世間では大往生といわれますが、尊厳を奪われた最後は一人寂しく逝きました」(千葉県・60代女性)

今回のテーマ「最後の医療」で触れなかつた、命そのものに関するご意見も多数ありました。

●「大学の講義で命の倫理について考えたのですが、延命することが自分自身や家族にとって幸せなのは人それぞれだと思っています。過ごし方を選ぶ権利を与えることがその人にとって幸せなのではないかと感じます」(福岡県・20代女性)

●「救う医療の対象がどこまでというのは難しいところですが、免罪符のように治療や延命を行うことは本人、家族、社会にとって不幸なことだと思います。本人が生きていることを負担に思うような治療や延命行為を一定の意思表示があれば、やめることのできる法整備が絶対に必要です」

(北海道・60代男性)

「最後の医療」という重いテーマにどう向き合うか。アンケートを始める前、どう問い合わせていいのか取材チームの記者も思い悩みました。

2回の質問に対する回答は計1600件を超え、家族を見取った体験や医療者として日々感じている悩みが多く寄せられました。

どのような医療を選びたいのか。アンケートの「家族と話し合っていますか」という質問に多くの方が「話合った」「話したい」と答えています。

家族のために自分の思いを伝えておきたいという考えが広まっていると感じました。

私は10年前、痛みを取る緩和ケアを受けながら自宅で最後を迎える選択をしたがん患者さんの取材をしました。記事の末尾に「在宅ケアに携わる人がまだ足りない」と書きましたが、10年間で在宅医療の整備が進み、がん患者でも

施設では、定期的に家族会を開き、入所者の過ごし方について話し合います。「いよいよ」となった段階で、最後の迎え方について家族と職員が話し合いの場を持ちますが、家族の中で意見が分かれ、3回や4回話し合うこともあります。中には胃ろうを始める方もいます。どんな状況で最終章を過ごすのかや人間らしい生活ができるのかといった点については、ほとんどの場合、医者や職員の説明を家族が聞いて考えます。

老衰自体は「治せない」ということも考えておく必要があります。医学が進んで治せる病気が増え、寿命は伸びたけれども、どこまで医療に頼るかということなのでしょうね。過剰な延命治療の背景には、私たちが医療に過大な期待を寄せてしまったことがあると思います。

老人ホームなどの施設で亡くなる方は確実に増えています。坂道をゆっくり下っていく方のお手伝いをしながら人間らしく生きて逝って頂く場所だと思います。大切なのは医療の受け方も最後の迎え方も自分たちで考え、悔いのないように生き、悔いのないように死ぬことです。

1回だけの人生なのですから。

(聞き手・田中康介)

救う医療どこまで

大切な人の死が間近に迫った時、どんな医療を求めるのか。家族がアンケートに悩みを寄せています。

●「先日、母が急逝しました。『自分で判断できない状態になら一切の延命処置はしない』と話合って決めましたが、救急隊が到着し、AEDをかけても十分に心肺が戻らない状態で心臓を動かす薬を使うか否かを問われ、迷いました。母の年齢、持病、その時の状況から考え、それ以上の蘇生処置は行わなかったので、病院への搬送後他界しました。今でもあの時の判断が正しかったのかと何度も考えますが、母と言葉で確認し合っていたことで『約束を守った』と思えることが私の心の支えです」(東京都・50代女性)

●現在進行形でこの問題を考えています。昨年11月末から夫の突然入院でどんどん悪化していく病状にただただ心配するばかりで私のできることは毎日顔を出すぐらいです。本人の家へ帰りたい希望をかなえてあげたいと強く思っています。が、病状がそれを許さない中で、せめて少しでも口当たりの良いもの、好きな味をと思ってもなかなか許可が出ません。肺炎になり、経管栄養を勧められま

したが、本人の拒絶感を思い拒絶しました。救命救急病棟では気管内挿管も意識があるので断りました。(神奈川県・60代女性)

●「現在、発病から4年経った膀胱がんの主人が自宅療養中です。不安でしたが、介護保険のもと、訪問医師と看護師を紹介していただきました。4年間でいろいろあった中、今の大切にしていることは、①主人の考えを尊重して、笑顔で穏やかに過ごす日を1日でも長くすること。②子どもたちにとつて、家が安心できる場所にあること③私がうつにならないこと。発病1年目に、私が考え過ぎてしんどくなつたのを踏まえて、こんな風に考え主人にも伝えました。困難なことが起きますが、この三つを踏まえて考えると答えが定まるようになります。私たちに関わっていただいている、すべての方に感謝しています」(京都府・50代女性)

●90歳の父が亡くなりました。はたからはとても90歳には見えないと言われた大柄な体躯、記憶力の確かさ。しかし末期の肺がんと診断されたのが昨年10月、2月15日に10日間の入院後に亡くなりました。病院では意識がしっかりしている間に身体拘束されてしまい見舞う度に家に帰ろうと言わ

れ、心が張り裂けそうでした。自宅で24時間看る自信は私にはなく悩んでいた間に父は急変しました。世間では大往生といわれますが、尊厳を奪われた最後は一人寂しく逝きました」(千葉県・60代女性)

今回のテーマ「最後の医療」で触れなかつた、命そのものに関するご意見も多数ありました。

●「大学の講義で命の倫理について考えたのですが、延命することが自分自身や家族にとって幸せなのは人それぞれだと思っています。過ごし方を選ぶ権利を与えることがその人にとって幸せなのではないかと感じます」(福岡県・20代女性)

●「救う医療の対象がどこまでというのは難しいところですが、免罪符のように治療や延命を行うことは本人、家族、社会にとって不幸なことだと思います。本人が生きていることを負担に思うような治療や延命行為を一定の意思表示があれば、やめることのできる法整備が絶対に必要です」

(北海道・60代男性)

考へ方はさまざまです。「延命治療は不要」との意見とともに、「延命を希望しにくい世の中になつてはいけないと思う」という意見もありました。それぞれの選択が最優先されることが求められると思います。

(浅井文和)

1. 人生の最終段階の医療を家族と話し合っていますか



3. 人生の最終段階の医療について文書に残していますか



2. 希望する場所で最後を迎えるために特に必要なことは?



朝日新聞デジタルのアンケート 2月24日～3月8日 計436回答

講演会アンケート&質疑応答から②

■介護と信仰生活、介護者のケアについて

- ▶ 牧会訪問の様子や小勝牧師の心掛けている事を伺い、自分の最後の信仰生活に希望が持てた。
- ▶ 介護する側が最後に何もできなくとも、祈ったり賛美歌を歌つたりできることは感謝。
- ▶ ターミナルケアには“教会”的意味がある。生から死へのケアは、人の命の完成へのお手伝いである。
- ▶ 神のみ手に委ねる事ができるキリスト者としての看取りがある。
- ▶ 絶えず祈りながら介護をしていきたい。介護と祈りの大切さ。
- ▶ 命は神さまから来て神さまへお返しするもの。信仰を得て改めて、父を身許へ送ることができた大きな慰めを実感している。
- ▶ 介護する者を信仰はどの様に支えるのか。
- ▶ 信仰者が介護施設や病院に入り、教会生活が困難となった時に、どの様に信仰を維持できるか。
- ▶ 教会や牧師、教会員がいかに信徒に係わっていかれるか。
- ▶ 看取りの儀式が出来ない施設が多い中、出来る事の範囲を知る。
- ▶ 各個教会の方法論について交流したかった。牧師に出す“私の望む葬儀の流れ”なども含めて。
- ▶ 生きる事だけが神様のみ心ではなく、死ぬ事も意味がある事と



知させていく事は大切な使命と伺い気が楽になった。

▶ 教会が自分の第一の生きる支えなので礼拝に出席できる様に祈り今まで来ているが、体の衰えは自然なことと思える。

▶ 自分の葬儀は簡素にして、死の三日前に病床洗礼を受け救われた亡夫が残してくれたお金は、遺言通り神様の御用に用いたい。

▶ 病床にいる者が話せるというのは同性の牧師に限らない。信頼関係で繋がる男性の牧師や気を許した知り合いでも良い。

■Q&A・ディスカッションについて

- ▶ 先に小グループで討議してから全体に質問や結果を報告、その後全体で話し合う方が良かったのでは。
 - ▶ グループで話し合ってから質疑応答が良かった。
 - ▶ 話し合いには時間が足りなかった。
 - ▶ 発言者が重複して偏りがちだったので司会者は配分を考えて。
 - ▶ 体验者が多かったので、みんなで多く話したいのだなと思った。
 - ▶ 質疑応答で講演内容の理解も深まり、良かった。
 - ▶ 立場・考え方の違いから多様性のある話が出てとても良かった。
 - ▶ 参加者の生活環境も多様化している現在、女性会で取り扱うテーマも更に多様性を持って対応してほしい。
- 女性会のくくりでは男性や若者、次世代の人たちが参加しづらい。興味を持つのが難しい→理解を得られないのでは？

❖ 9.22 一日神学校



女性会ミニショップへのご協力に感謝



9月22日(木・祝)は雨模様ながら、開会礼拝に続くパイプオルガン完成奉納コンサートのプログラムもあり、参加者は600名を超える盛会となりました。オフホワイトが美しいオルガン本体最上部には中央に“SOLA GRATIA(中央)、SOLA FIDE(向かって左)、SOLA SCRIPTURA(同右)”と刻まれ、演奏に聴き入る参加者の視線を集めっていました。お昼か

*“恵みのみ、信仰のみ、聖書のみ”

❖ 神学校・神学生は今…

<http://tngteens.hamazo.tv/> ← このサイトから神学校通信へ



「神学校と神学生へのより良き理解」を深めるには何が必要か。「TNG-次世代育成宣教プロジェクト」、「癒しとは」「介護について」など、みなさまからのいろいろなご意見をお寄せください。お待ちしています。

❖ 第4回女性の集いのご案内

10月15日(土)10:30開催の第4回東教区「女性の集い」は東京教会を開会礼拝：後藤直紀牧師奨励、第2部は演題『介護される側の実際と意義』を高橋睦東京老人ホーム施設統括長と伊藤早奈牧師(ビデオレター・文書で)がご自身の体験も交えてお話を後、参加者との活発な質疑応答と親睦の時を予定しています。

少子高齢化が進む私たちの暮らしの中で、「介護」について見つめてみたいと思います。そして信仰者にとって、教会にとって介護とは?男性も若者も大歓迎です。みなさまお誘い合わせの上、どなたも奮ってご参加ください。

これからのお予定・ご案内

● 第4回 東教区女性会 “女性の集い”

～介護される側の実際と意義～について

日時：10月15日(土) 10:30～15:00

会場：日本福音ルーテル東京教会

開会礼拝：後藤直紀牧師(板橋教会、東京教会協力牧師)

第2部：講演

講師：高橋睦東京老人ホーム施設統括長

伊藤早奈牧師(ビデオレター&文書)

講師・参加者との質疑応答

*男性・若者どなたも大歓迎です！

● 東京老人ホーム訪問・交流Day 東教区女性会

日時：11月19日(土) 13:30～15:30

場所：社会福祉法人 東京老人ホーム 2F

特別養護老人ホーム めぐみ園 西東京市柳沢4-1-3

前半：高橋睦施設長のご挨拶の後、お手伝い作業。

後半：ご入居者との親睦を予定。

*一人でも多くのご参加をお待ちしています。

詳細は追ってご連絡します。

おしらせ

シャロンの花だより掲載ご希望の案内・特集・紹介記事などが

ありましたらどうぞご連絡ください。

“女性の集い”や他の会合で取り上げほしいなど

ご希望の講演・学習会・話合い・活動などへの

ご意見・ご希望もお寄せください。

よろしくお願ひいたします。

● ACWC一日研修会

「キリストに結ばれて」～今や、恵みの時、今こそ、救いの日～

日時：11月11日(金) 10:30～15:00

会場：日本基督教団 富士見町教会

Day メッセージ：大塚啓子師(日本基督教団 目黒原町教会)

聖書研究：金必順師(在日大韓基督教会)

発題：日高龍子師(日本バプテスト連盟 平岡ジョイフルチャペル)

主催：ACWC 日本委員会

2015年度一日研修会「報告書」一部500円販売

問合せ：田島奈緒美(雪ヶ谷教会)までご連絡ください。

Tel&Fax: 03-3720-5525

● NCC世界祈祷日

フィリピンの女性と子どもたちを覚えて

日時：2017年3月3日(金)

会場：日本基督教団 富士見町教会

主催：NCC世界祈祷日 東京地区準備委員会

担当教派：救世軍 東京東海道連隊

* 詳細は追ってご連絡します。

お詫びと訂正

ほっとニュース第1号(2016.7.15) これからの予定・ご案内

■第18回ルーテル子どもキャンプ欄中「来んさいヒロシマPeaceじゃけん！」下段に、中西久氏(カトリック松戸教会員)との誤記載がありました。

■第4回東教区女性会“女性の集い”欄中、伊藤早奈牧師のお名前を佐奈牧師との誤記載がありました。

関係者みなさまへお詫び申し上げます。



❖ 編・集・後・記 ❖

地震、台風などの被害にあわれた方々に、お見舞い申し上げます。今回も、多くの方々のご投稿により、「シャロンの花だより」を作ることができました。心から感謝いたします。(K.H)

九州はじめ各地で地震や天候不順に見舞われたこの半年、金木犀が辺り一面匂う季節となりました。被災された兄弟姉妹と共に生きられてクリスマスを迎える日々が近づいています。主の祝福と平安、希望を祈りつつ(K.Y)



東教区女性会会報 第89号(23期第3号) 2016年10月10日

発行人：日本福音ルーテル教会女性会連盟 東教区女性会

発行者／編集：八木久美 編集：保坂和子